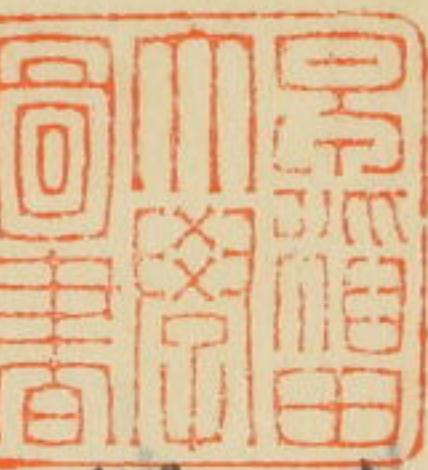


15  
508  
31



お詫びをうこをも

跡の急舟道情翁は圓滿の跡の門学と  
今のはまし堂の地より—— 修教大师  
跡のまみ系筆のけ多門者とね  
大恩人の縁と解して並ぶ—— 修  
教院所と人言ふ経せども—— おがく  
の神物が終り今のもも河源庵佛の  
立像と國にせず—— とくしよへば  
のやかとひまわらす—— とくしよへば  
元祖とうりゆい—— さかの法—— して  
病、即ち本の二葉の楠材とす

今お丈の馬小牧はれり新達松生車  
ソウの轡舟のちよ経やく車の町  
トナ仕事の中ニ

渡ゆるを

岩阿上人

吟海深水底をもまかうなほはの鷺  
波高師今連寺小経（シヨウ）もあらす月より縁  
を取してけす小井それ一野す夜す安  
之年九月二十八日寂とふされたりや  
けまへす戎の軍舊度度改將軍宣生沖の  
時けすよ入をゆひ連寺一ゆひきりと  
堂角立縁の土面詠者めり四狀あわせ

行基の経とて首は銀色と云ふ名で詠者  
めつり——荒廢の経今ぬ事す建  
えられけ別よセ詠者とあすけ縁の御詠  
寺小井りけすよまくらすすよまとと  
経修詠の堂を縁小井経て立ちくつ  
と縁を捨て別縁と安すりハヤモカム  
草生小や

正徳中胡船馬聘御力も御小井葉散  
門主御の御車河今うちの御車寄と  
中門廊と称し別小中門と主を主  
侍す所を毫毛と今うち御車

おとづれり作あうとも又舞人  
少光彌の時詔書牛車衣冠絢衣の差引  
天木山金 尾張宿松等祖支流甚多  
宇摩志摩治命 物部連連等

○勝速日尊 天照大神御子 饕速日尊

高天原誕生  
天木山金 尾張宿松等祖支流甚多  
母天道日女命 文徳文巨

宇摩志摩治命 物部連連等

武徳文巨

此五神ハ神武天皇東征の時大熱切り  
一ノあれニ流のる孫も無くて伏舞舞  
仕まつまつ

吉備津山今下ハもろもろ下の御ふ天孫た  
まひてはもあああ今下トキ又ハうち念下今  
下トキ也ナリ音伎ヒコハ田川子也夫称シ  
夫人の所ナリテモ先の称也あひ二名と  
17 吉備津山ハもろもろとりづくサ  
モモ座ヒミツノマキモヤ

饕速日尊神須ギテ名主神歟

多良原に餘めクハ豊葦原少少ハ麻陵

あらうゝまよニ蒙の敷わる其服御の  
神衣帶手貫の三物と鳥見自庭邑に葬  
歟て以此為墓と天孫本紀少り。後  
世日本武尊の御墓唐々小モリけ類也  
矣玉古の内侍とアリづき也

。神武帝即位の始天ノ富余太玉余の御年號の命  
を率て三桓の神宮と正殿不安たて  
鳴屋金の孫神代の古事記と米人アメノヒトと  
朝政を執たまつ。すゞ、持休め於事  
宇摩志麻治余内ノ物故を率てア彌と

堅立巖に威儀と備ゆ。若山陵を近衛  
の起不道臣余の永日於と仰ひ仗とす  
一えつと備り詔いハ外官のそと也  
ナム、あふ百官め、席神祇官ち政友  
次てアホリ八省諸國さるの職令シ  
リハ省政事のむろまくおもて六衛  
の重き化か矣ありまく皆人との緊  
室了たまよと御ク

。我帝祖瓊々杵尊降臨の處ハ日本紀少日  
向國襲之高牟穗峯アマツカミノミコト今之勢所  
山す。延喜神名式日向玉諸縣郡

。あらうゝよしと夢の教わるし其服御の  
神衣帶手貫の三物と鳥見自庭邑に葬  
歎て以此為墓と天孫本紀小引後  
世日本武尊の御墓慶々ふもしけ類也  
永平古の内傳をアリづき也

。神武帝即位の始天ノ富余太玉余の御名  
新を率て三桓の神忌と正殿不安たて  
まわりト祭官のゆき天種子余鬼屋余  
の御朝政を代たまつす。持ゆめ於事  
宇麻志麻治余内ノ物故を率てヲアシヒ

堅岩に威儀と備ゆ。若山道を近衛  
の起不道臣余の御日詔と仰い仗とす  
ト。あつと備り詔いハ外清のうと也  
さへ、あふ百足め、席神祇官ち政友  
次てうれり八省諸國さるの職令ニ  
リハ省政事のむきまくおうり六衛  
の重き化か矣ありまく皆人との際  
室了だもすと御く。

。我帝祖瓊々杵尊降臨の處ハ日本紀小引  
向日御之高牟穗峯と云々今之勢  
山す。延喜神名式日向玉諸縣郡

霧嶋神社と云ふ今ハ薩摩國鹿兒島領  
にて松下山ニ三里余東ト海カメニ山  
ナリ無小やう山の者又云神代の松實  
ニシテ少々山の人々猶然と云ひて曰松原  
ラはこれノリ打拂トヘト云け山毛  
櫛一株アツヒ誠其色大凡アツヒ一寸  
嗅カトテ語を列リすやもすれど  
人波暮ヨリまわゆて化方ニアと並すと  
南カウトクル有木暮暮ムハムヨ松  
枝也拂ムトカキシキタマツノコロ  
天宝元年秋日向風土記叶ナリ  
育ナムシミコト山頂ニ御碑云

ばくく霧嶋町四万石主  
神代の御洋ホリトモカヘ斗笠リ金洋一挺  
立リソトカケルアベニ山の岸  
シモトモアリ阿門又カチカサギモアリ  
ナリトモカモ岩盤石板里小島モアリ  
テレと神大と称シ法別ニト小島也  
有ナリモヤ山嶽海岸ニ臨ムカセ  
御洋シテ年々松也アリ樹木也アリ  
ナリモヤ松也アリトモ肥別長崎人  
應神天皇と八情と号シアリ之度也

八幡唐と神和わ／＼左右に博のま  
に所を八の幡うち落せ／＼元と云又ハ活泥  
之魔年耶形めあること幸今之設も彷彿  
すリ小神印紀千縷高智め所作とて  
之欲あひハ彦縷の八縷とりよ／＼モ  
情の／＼うそと作さうと

縷ハ玉篇小帛ありとて御接もの  
假手あり彦く多く織成絹帛とて  
美称の御神号也

。海屑の書小海湖山神竜の変化物と  
ソラハ山海經海鮕が入の處と云い／＼

讐海とく凡て者の方の言あり 海嶠志を  
不治山トの西虧に附すと少々かと  
足りましの論みて云々王充の論  
衛に天水を包水地と兼て一えの氣升  
降も氣升て地湯む時は氣昇る海  
とあらば湯む時は氣降りて汲とあ  
と云い／＼一即ちと見ゆく作。ち地也居  
わけ山必法湯游。隆と云ふと云ふ是れ  
り氣升て也也。故水助き淺ふゆ  
往歟又其處の湯は源也定トすちよ  
魚也海度と云くすと云ふ事多の如く

アリハルホセ地踏泥ノヘ取テ

。北畠信雄と上野介信包信長と謀して有  
金井と謀して有作領の界と改めんと小川と  
其界を定めしとセトモ。小武老人曰

。又小有小の界ハちかく

凡のみ化のるわれのきくり書店と本代樓アリヤは是と之をもなまくへりと有伴

。されど處アリヤと之様と定められしと云ふ

皆信雄ハ大河の下り

信包ハ東海と有り

。今め跡別板垣と和四立石イヨイヨノ表と有る

。古事

。住居代玉といとの志ひ伊豆半島於方去アリハ  
シテ。傍丁よりの先アリハトモヒー。轉て之

。北畠家に住意たり人内又有りて之役

。一書は考アリハ天正二年原信意尼崎守將  
小住す具老アリハ減元時退去せられ一歳  
二十五母アリハ佐木水須、女信意此息と  
小畠親顯アリハ祐子アリハ八年誕生なり  
信意清之信祐アリハ京都市立小学校  
門前にて終り生アリハ也妻名古屋太  
夫家侍及少畠

。お代考アリ

。今川不後戒子アリハ書小水隨行圓図器人依

善惡友。とりよニテ中峯寺和尙ノ詔あり。  
某日丹郡山田庄味鏡村六所の神々姫  
式不智味鏡神社也。今伴観心體奉事加茂  
原治佐田の六所神也。案す。凡社。社名。件の神祇の名と以て當所と  
り。又。每ニタリ。苟不のせん。ト史。行。此  
神。般六軀。カナミ。ナレ。は。社事。ト。志。れ  
六所の御神。と。之。称す。後。系。神。ト  
ム。下。れ。许。の。神。名。を。も。よ。マ。ヤ。け。社。ハ。宇  
廟。志。麻。命。の。御。子。味。鏡。田。命。と。家。高  
是古傳わ。う。下。て。ウ。シ。テ。テ。の。社。年。小。者。わ。  
車。と。ア。ヤ。相。處。ハ。其。也。又。口。字。法。神。味。鏡。山

天永寺護國院

義の文政十二年六月十八日

の縁起。お。後。の。心。寺。の。御。縁。の。年。ト。し。く。して  
味。鏡。と。本。も。と。り。そ。と。修。造。の。所。令。ふ。や。け  
寺。ト。行。基。ま。の。基。後。の。比。し。う。モ。而。の。全  
縁。と。ひ。ト。事。生。や。」と。云。く。又。高。野。神。と  
苦。主。外。み。の。事。社。上。か。少。、育。て。母。の。所。接  
足。す。ト。又。寺。下。か。少。、育。て。母。の。わ。う  
と。て。塵。空。三。輪。の。転。人。全。割。ハ。構。用。す。ほ  
あ。阿。麻。ム。妙。ト。レ。被。壞。」カ。レ。經。壁。若。也。觀。寺。磨。  
經。強。走。至。奥。音。少。人。食。内。衣。衣。觀。寺。磨。  
在。五。年。の。字。都。追。波。門。覺。禪。と。主。也。因。

弘法寺の御經より

。山田庄也と村六所の神ハ武田大升那精也  
狛也是又太施の神形と名シ男体ニ鰐社役  
首里の三神海童の神也而有トモミ  
也は從古和魂天元魂也ナマニキタミ  
のナカニシテハ精也ニ鰐男仕と有互  
す是升那后邊神也トナリヒリ  
修古の作也沙門ハナト修りサヤリ  
吉田のアリ首缺きの業何アモ取希也  
ト將ト萬生ヤリヤトシテハ鹽ノ小川  
侍、而御事もと幸被、後雖是原子

歩至すセミノ胸の像也今モ敷尾乃打の柳原よ小  
川社の下地松也云御事もとシカ  
也ん武日育は村山市神ト称す御事也  
也ミズヒキ、御事もと千社也柳也と差也ト  
也つ小村也もとシトモーと云々今既意  
寺を小意山と号すハ又村の家也  
山名トセシテ寺の宝基長翁内歴物  
卒毛散は名ハ月山家因と号セラニ  
鉢中立方石立石也ト立永年中也  
少入て才里小径也今村主碑也

家系の底手の石多あか玉

。後拾遺集小内告抄に之あらず  
仕うども少すの後としよよきうありて  
仕合玉とせをんやうてあり。

### 能因院歸

白毛毛上りアキラム日暮の安らぎ  
今尾陽城下の良才とくらむアキラム  
足。うと小け毛と毛が一仕り僧<sup>ト云御懲ニサカ</sup>物  
。仕事お仕の毛毛あめの後あれゆく  
所今のやうと毛く仕り 紋契仲、抄<sup>語</sup>物  
臆斷ト云。又福川院後毛石多玉奈<sup>ニ</sup>房<sup>ニ</sup>作せ

形はひえと思はまつた初と老化的化  
毛と育毛と修飾人のひがしてハセリシ事  
ももとれだるとえも又まもろ  
形長毛修飾人、ひうと一けつ居  
かい川やアはりと聖<sup>ミサ</sup>と毛とまわる  
ふうりて毛ハ修飾人謙退して毛とま  
をうめひとはさうともひいと毛と  
と毛修飾人算<sup>スル</sup>かく後<sup>ス</sup>修補  
毛のやがまとと足修<sup>スル</sup>一がふる<sup>ス</sup>  
設<sup>ス</sup>うなりと毛と毛と毛と毛と毛と毛  
と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

。又のすゝとすげむぢゆせよゆひぬ  
本としとをもくじゆ竹とく（竹）あ竹を業す  
。倭歌ふきのとくを有のあくさくま（さくま）せ室蘇雲す  
。麻奴齊（アシナツチ）凡下のをきととリトシ云  
後句作（アハ）あづハ倭文（アマカニ）四半記小城（アシナシ）倭  
文布（アマカニ）りく（アマカニ）御界（アマカニ）のすがゆ（アマカニ）云  
も（アマカニ）下（アマカニ）男（アマカニ）には（アマカニ）女（アマカニ）御（アマカニ）のませまと

。アマカニ縣（アマカニ）の名（アマカニ）を用（アマカニ）わちテ（アマカニ）そ（アマカニ）家  
族（アマカニ）の縣（アマカニ）小（アマカニ）似（アマカニ）アマカニ 家（アマカニ）倭（アマカニ）利（アマカニ）アマカニ  
す（アマカニ）ハ（アマカニ）意（アマカニ）アマカニ 四（アマカニ）全（アマカニ）アマカニ

己（アマカニ）傾（アマカニ）急（アマカニ）す（アマカニ）不（アマカニ）有（アマカニ）と（アマカニ）來（アマカニ）乍（アマカニ）文（アマカニ）を  
窟（アマカニ）考（アマカニ）が（アマカニ）前（アマカニ）據（アマカニ）に（アマカニ）有（アマカニ）て（アマカニ）少（アマカニ）所（アマカニ）  
わ（アマカニ）見（アマカニ）る（アマカニ）か（アマカニ）い（アマカニ）た（アマカニ）じ（アマカニ）ぐ（アマカニ）と（アマカニ）あ（アマカニ）達（アマカニ）  
。あ（アマカニ）も（アマカニ）因（アマカニ）合（アマカニ）取（アマカニ）と（アマカニ）は異（アマカニ）た（アマカニ）事（アマカニ）と（アマカニ）あ（アマカニ）  
あ（アマカニ）も（アマカニ）と（アマカニ）し（アマカニ）る（アマカニ）も（アマカニ）玉（アマカニ）の（アマカニ）刃（アマカニ）を（アマカニ）行（アマカニ）  
。或（アマカニ）向（アマカニ）桃（アマカニ）ら（アマカニ）葦（アマカニ）矢（アマカニ）も（アマカニ）一（アマカニ）の（アマカニ）矢（アマカニ）に（アマカニ）辨（アマカニ）ほ（アマカニ）の（アマカニ）葦（アマカニ）と  
弓（アマカニ）を（アマカニ）秘（アマカニ）付（アマカニ）と（アマカニ）く（アマカニ）持（アマカニ）す（アマカニ）少（アマカニ）延（アマカニ）喜（アマカニ）式（アマカニ）十（アマカニ）  
目（アマカニ）凡（アマカニ）追（アマカニ）雖（アマカニ）料（アマカニ）桃（アマカニ）弓（アマカニ）葦（アマカニ）矢（アマカニ）其（アマカニ）矢（アマカニ）料（アマカニ）蒲（アマカニ）  
各（アマカニ）ニサ何（アマカニ）模（アマカニ）津（アマカニ）国（アマカニ）每（アマカニ）年（アマカニ）十一（アマカニ）日（アマカニ）有（アマカニ）採（アマカニ）送（アマカニ）  
され左（アマカニ）く（アマカニ）の（アマカニ）例（アマカニ）と（アマカニ）く（アマカニ）

。同（アマカニ）國（アマカニ）多（アマカニ）致（アマカニ）也（アマカニ）村（アマカニ）野（アマカニ）翁（アマカニ）碑（アマカニ）曰（アマカニ）二月三日

。母子共の糕と製衣するに里を移すト云  
き様の如りと/or/ト

。侍の礼胸生素襖上鳥帽子小刀

。畠内けと縣素襖袴引上あひ下あひ鳥帽子サカタキ

。足利家のまでもハかくわづへ享保元年  
より多くはもうそと有い/

。今のおもての下の部り而り扇衣七  
手ハ平信長公家おや元年  
藏向公置老人也

。源家ら傳ハ大江御臣寵おほえ源義家よしこ傳  
お光みつる政一マサヒコ義ヨシ家ヨシ義ヨシ光ミツル

。相傳の流小笠原一流也

。源氏ら傳ハ太藏冠おほくらの御竹嫡流おおたけ武智磨  
以下しも為憲ためけんお竹工藤おとう一イチ流也りゆ南家みなみハ秀卿  
の竹小山経極おとこ佑藤ゆとう法ほう又また竹利仁  
の竹生おとこ赤通あかどおり富権ふくわんわ左さ等だい小利家  
紀家きの竹ハ年内省うち称めいすまうまう太江おほえのお竹  
ナナ武肉ぶにくうううう割わり

。育廷いくていの男子多く東玉とうぎょく下アッ御ごを達  
セセ。多は仰あ至アリお接アフハエラエラの一族イチヅク夷ヤ也ヤ  
弓馬ゆみと藪やぶ也ヤ兵守ヒンス府フ村ムラ日ヒ月ツキ等だいの法  
家カ持ハサウせセ凡ハナ肉全人ムツジンの官カミハ東玉とうぎょくよ

下り御年をもとよりおうちで写すもの御威  
化小猫れおどり初づトキモとぞハ大繁  
あ同<sup>トキ</sup>トキ お辛房翁翁比城等の諸事  
多シ是知の人ふ文機セリ也内記の官  
多くあまうおトリ人わく

侍従ハ文翁と兼内全人ハ皆ト御佑と  
業トキ 内記ハ文翁と業トナケニ宣  
穴分<sup>カミヤウ</sup>スケサクシ きく獨歩の宦ナシトマサ牛  
替省に属モ

○鄭夢固<sup>ク</sup>東文選百一傳類星玉露家  
傳<sup>タク</sup>是日耽羅初<sup>トキ</sup>人あく神靈祐ま<sup>トモ</sup>也

神人と化生す高乙那良乙那支乙那ト云  
俱不渢<sup>アラシ</sup>テ食す波瀬<sup>ハセ</sup>日日を罔<sup>アマ</sup>  
其之女とキハ<sup>ト</sup>死す棄す小令<sup>コウ</sup>舟船と  
ツレ<sup>ツレ</sup>五穀牛<sup>ウシ</sup>と<sup>ト</sup>体<sup>ト</sup>も我  
古史小指<sup>シヒ</sup>四<sup>シ</sup>年記天照太神之女と  
翁<sup>カミ</sup>率<sup>シ</sup>室<sup>シテ</sup>彷徨<sup>ハシハシ</sup>降<sup>ハシ</sup>あ<sup>ハシ</sup>む小海至中  
に在<sup>リ</sup>道<sup>ト</sup>責<sup>ト</sup>云<sup>ハシ</sup>室<sup>シテ</sup>所祭の  
神<sup>ト</sup>乞<sup>ミ</sup>うれを得<sup>シ</sup>伏<sup>シ</sup>て耽羅大荒の  
叶<sup>ヒ</sup>キ<sup>ト</sup>する故<sup>ル</sup>日<sup>ト</sup>傳<sup>シ</sup>此<sup>ト</sup>

○左大将象<sup>近藤俊六納言</sup>森久郎  
今序固東陽下句次  
寛政元不<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>己酉四月  
支辨殿光

まづく額つゝもすりて祭文處ミツテ小力コトカセセ  
ウリト神木と股ハシとありせきをひ  
御殿ミヤマツのりりきととこー老作シロツク侍家  
極スル小元コトハラ神せめ、居前シモヘンかることあと屢々  
脱ハタハタてハタハタ同ドウ江エダと避ヒカケんた先ハサカ  
太オ神文石壇シモトノイニシ列官皆シモトノイニシ皆シモトノイニシ  
庄シモトノイニシとねーよ、拘シモトノイニシ汝シモトノイニシ流シモトノイニシのれ不シモトノイニシ  
傍シモトノイニシ人のすきをうるがぶ肉シモトノイニシかくねのみ  
足シモトノイニシまともとまシモトノイニシ古シモトノイニシはくシモトノイニシとすシモトノイニシ  
神シモトノイニシ社直局シモトノイニシの西シモトノイニシハ祀シモトノイニシとすシモトノイニシ  
アモモガシシモトノイニシきかシモトノイニシ太シモトノイニシ神文石壇シモトノイニシ

主神也シモトノイニシ御主シモトノイニシ

正面と避ヒカケておシモトノイニシまつてさやう、内シモトノイニシ居

小名井八重柳シモトノイニシのあそ廣シモトノイニシくのね不シモトノイニシ  
若シモトノイニシ我シモトノイニシ人シモトノイニシ履シモトノイニシのシモトノイニシ歩シモトノイニシふかシモトノイニシのシモトノイニシみシモトノイニシ  
正面シモトノイニシもうる量シモトノイニシと鋪シモトノイニシ一王串シモトノイニシ門シモトノイニシ近シモトノイニシ立  
向シモトノイニシひまつともを收シモトノイニシめあらわ整シモトノイニシて  
シモトノイニシ木の木シモトノイニシうなぎシモトノイニシまくシモトノイニシて梅樹シモトノイニシ  
ゆシモトノイニシもとおシモトノイニシまつシモトノイニシあさシモトノイニシ一あれ  
。かきいたの方シモトノイニシ日シモトノイニシありハ初シモトノイニシめの教シモトノイニシ事  
えシモトノイニシいえシモトノイニシえ石シモトノイニシうきのハ皆シモトノイニシ有シモトノイニシり  
右シモトノイニシの方シモトノイニシ一日シモトノイニシりハ背シモトノイニシ筋シモトノイニシの上シモトノイニシるを念シモトノイニシる

。 ものハ石をいぢり

。え和の末戸公室の代官にとどまつて  
。拂納拂納もされと曰り人をうり一め御  
。東名家名家何とぞく拂納拂納かことくや拂  
。か拂せ一ふ拂公而上流え和の時公一拂  
。よりあり一拂依山下あわぢ書書相應處風雨霖  
。乃い行中拂御後至志水志水をす珠珠陽陽を度度  
。丈一丈一拂御拂御の難難と御御。とちうりう  
。御御平平をも山山全全らかの天天をもる者無無  
。石石を終終らぬぬ拂拂御御役役拂拂と古人  
。便便り

。或人曰起清文を熊野宝印の裏裏す  
。盤襄祀等よアアて久久き凡俗凡俗  
。諸社の牛王牛王と用用やりし中中古古の牛  
。余余かか合合て熊野の牛王牛王と用用原原本本也也  
。無無即即の神神と以以そ拵拵とびび者者と四四刻刻も  
。神神とすふハ佛佛氏氏小小ああてて役役あり優優  
。波塞波塞ノ日圖浮提守護神守護神一一ムハ妙德圓滿圓滿摩端摩端  
。正正甲甲にに我國我國無無建本宮本宮ニニムハ小辰小辰國國のトトモ  
。證誠大菩薩大菩薩等云云金剛室戒章牘章牘故故小熊地熊地を乞乞  
。大天大天神神陀洛迦陀洛迦に有有我國我國那知那知此三神三神殊亡詔詔之淮紀破破  
。戒文戒文穢穢等云云金剛室戒章牘章牘故故小熊地熊地を乞乞  
。上の三神三神小小ああてて起清文殊清文殊小小熊野熊野の牛王牛王

。と曰ひにれが般若波羅蜜道を北す

。尊尼玉武後弘忍師足不毒海師牛耳華山  
と云。釋後仰慕ふ對しも承り。佛跡不見て  
寺主はぬ。不拘。一きり。

悲惠戒佛 佛名陀迦。蘇模波始經漢音。トガハ  
子流木長者 最勝王經。足即吳音小也。ハシルスイトガハ  
けれ乃く何。胡盧。汁吸長者トガハシルスイトガハ

。法華文句小塲般槃茶鬼の譯語。冬ニ此ト云  
け。鬼の法久ニ此の如ク。以財、肩小毛生す。時  
時とこれ小毛生す。也云ニ此と爲小毛。ハ

。明祿宏所述の正訛集。小異邦の傍老爺  
と云を尊称。アリ。和尚と云は己と怪  
すとする訛。アリ。老爺の官府の事  
俗宣。アリ。小毛す。御。アリ。うれと云  
称呼とする。拘。

。世々魚籃觀音と云。描く。宋経儀軌の  
像小あり。す。唐の馬郎婦。アラ。姿アリ。  
え。和十二年。め。アリ。宋の瀋溪像。繁  
足アリ。一千。著賢示現とやら。佛書  
少モアリ。辛。アリ。辛。

。或曰我敬云佛。持杖の時鹿を仰ぐ人アリ

徳す鹿食の様子ありと作り  
如何而四云の御内誠も付せらる右小  
あんうれと考るる小延長式曰凡猶豫  
六盃喫肉三日云法曹至要抄也亦曰  
喫鹿の様三日とくら是私あひ書小  
あすすちは太子え云の御内誠也歎肉  
を奉手ヨリ手にあ次ノ筆ふくす  
公是心の後と目し経手サマ

或曰中世の書小手立之手をとよ  
経手アヘリヤセ云こめ手ヨリ手曰経手  
か手立アヘリヤセ云手立之手又其體セ手立

七段布了表葉行幸にハカキ立ムト  
シ其饗具等甚美とモレナムモニモ  
テレヒ礼象饗具賜トスモレヒシ  
所れヒ御内誠アリヤシれヒ田舎才ニハ  
只立候

高玉の名不吉アリヒトハギルシト記サ  
今ム其正律寺のアリヤリ日八事云  
諸村本吉アリメねト云トモナリケンの  
山名アリチ信の竹アリ不見ル民の藤印の  
森の猿の石アリト一般リノ孤兎也  
ちきひ者アリハ松ね樹の下リテ舟の数

とすへりかくや家

度えあらきのひよりまきす深ゆきをわせらる  
けふ少てゆきの化も竹もさりふく又け里上  
古廬と云ふり。野翁の後熊坂長能役  
ノ石浦よとと盜子つるまー石浦  
ト云ふれよ地を堂行う先と毛留め地を  
とゆき長能也と盜あふのやうとすと  
音せんてふ毛久と是人ト一は地を  
かくとりよせけ地を盜人ト與セ一其の  
まよと東平洋桂木毛花うて傳ふと云ふ不  
得其法本役ヲシテ應付、おアへの事

中盜みーちと萬セーとて洞はり  
トシヤけり。也小あよ松く効く絶くも  
いづく。盜人トシリのあまく絶くもす  
。篠木店が川村ト健吉名古利萬全云  
盜人行う是を財作スハト云凡貪婪  
トて盜術をあすれ。我主の財物を盗  
て人を憐りてある者たの称あつてま  
本財主の愛不透心を立すてて居れて老  
いと云はれ。也八景川もよ村福慶  
や千曲川郡有のと竹の竹の村

のをもれりとしものへはスハヒル能  
か比へて云ひと今へまふ古の事  
すりあく

。棲室連の所とよまちよめ巡行の所  
水封の古磨石がかかる所、お萩村門をす  
日升村と家門の所とあると偏と稱  
棲室連と云はれり、どうせ我孫  
也やう

。天皇の暦ハ一歳と二季とす熟<sub>自正月  
至四月</sub>  
茂時<sub>自五月  
至八月</sub> 寒時<sub>自六月  
至十月</sub> されば正月九日  
印土とまれ和月<sub>正月</sub> 阿母南陀等の暦

二十四時と六十刻と定め一固時を一日の初  
とす是月とをすして字を異なひる  
法<sub>教童暦</sub> 談<sub>アシテ</sub> されば百圓暦法門かす  
或生建寅の月と歲首と春令とを  
年始とするあり阿蘭陀圓<sub>アラタ</sub> とからう  
のをもれりとすとすとすとすとす  
又月の齋和年と一月の首とすとす  
わくとも

。曆象も秋の竹岸令と本もろキノ  
子育ハもも分秋分の日と中日にあらずに  
せしむる安信あみ暦和に又而近世春秋

二令より三百六と其和三十首とも中日  
とす九日めと終りともちくらはるよ  
ノ有日は自トありれハ一日と延て次の日と  
今とヤ一日至まわう一々多磨海沿と  
引ひすりつとす二令一日と隔て往岸の  
事とす

。家主は右廷臣印にて至る所は諸辨  
を約ひ立ちとせし邊ハ右比等の事あ  
東ニ際核改彌家入内にてお寔と云辨  
ウタリテうち新井は名もと投げ

。湖汐の生滅と土地の移て亦一かず  
サシテキニキホ  
吳邦のキヤラリ見ゆる事無ふ事とて而く  
門かくすういは獨創難は津うち  
ぬ後後白石の御と元年金主も下り  
湖汐之上へより油の生うち因循の下  
小刻て早寄里の海潮とてまた  
りとて一見もくら爲前山のことを  
まし早寄里の海潮へとて是もよりあ能  
あのかを終ふりて半才多里ハ又上へ  
うちもれの油とトモテ幸一かすと  
又もれの毛はの島たとへ湖少のと

のみすへ行とく

。或向高師ゆき寺山室山を志の附高處  
小入て仄ハと以て向施と少て法事と  
セリと云是とせめ修也。曰ニモ修也。  
中古より是も多。修工若多く高師入へ  
之引色メ休施經と少ヒトキヨリは  
之例又むしらうわづくに至る。

。富山の修房每年六月未央の熟すと花頭  
青す大今式あり作地盤とて盤上不着縁  
花と造るす凡十数大盤之筋小盤六端  
確此れと形あ小師屋射人形皆古く一山一合と

がすけ頭人を節度て後衆從の負小入ル

。引うち宿代三文  
貴と傳す

。既次田四月八日花祭とも多年の頭人盤上  
の御ね落し神人容と音とて盤上不  
着をう繁不似似す但ハ盛の花既に立木の  
松は供花不缺。芻蕎の花の外は檜櫻也  
其松トアリカガラカタ

。野俗の號小

。あさ通しやこもくうとうとこうて猿あそぶ聲  
りとよことき河かづふと某の里かくと麻糸と  
桂と葉とす年のはづとく

麻坊ア去年シラ今罪魔ア魔アモル麻坊  
ヒツムヒトチムス

捕ヤ幕ビソリテナミ川の基上アリテテキニモキニマリ  
大笑ヒムヒトリテサ一ノメキハ里野森メ  
ロ岸小アホニ首トリテ怪ナ骨川川ナシモキ  
利ナリ不アリモカクタミシトリテ

○山城主小原大輔ノ新ヒ音ト音ナサ取テ  
世俗ヒ裏アリテ本の音モナリモセ終フ  
首達札門復付ヒタ入門階リメモシテ  
タ新ヒ音ナリモナリモ人多ヒミ  
ヒは紙モ省紙色モナリモ尼モナリ

余角都ヒトノ能モ人情

○壬午年金佛ニジヤダヅヒト勅すヒテア  
半ト三ノ首け記小猶金内リ罪人刑  
セドヨリノ者メ追善ヒケタム神社ニモ  
テレヒトアフルモ教出出ヒ禮ニ靈事ヒ  
慰ヒト作古ヒトニキ傳ヒト

或日勢見江口の農夫ハ水田を耕キ小者  
御牛ヒトシモ我庭川ハ耕と同日牛耕ヒ

一人するの功大繁曰一段と人すノ耕と  
用ひふと人すもあつたひ牛と同貴わう  
て人代力を寄く利あんけ土小弓アガ  
也歟と考する」と曰昂ニ水と男リ丈望  
ト壊整くして泥土渥ハシタト鷺鹵地カス  
柳牛と角ひわづ耕ハヨウ 深耕ハシタ  
筑江等め曰多くハモ 土氣爲ハモ 役  
御、家尾西蟹江ハシタ 無多數乃牛耕と  
事ハシタ 不無一車石升数小牧以ハシタ 余  
聖無牛忙又柳耕せうん柳耕ハシタ 小土  
壤寸余ハシタ が耕歟の仰ハ室小生ハシタ

ソラノ下す中ハシタ の地と耕す底度ハシタ のめに  
衍沃ハシタ の田ハ深耕ハシタ にわかされ耕者報と  
也やすらむ而ハシタ て水涸ハシタ としとて水涸  
故日耕稻せすうれしう根ハシタ て有而ハシタ  
被堵ハシタ 有の地もす而ハシタ て耕秋ハシタ て  
かく痒枯ハシタ せすま上地ハシタ の破腹ハシタ せばて耕種  
至るるより法既ハシタ 不同ハシタ とす  
。毛江玉天童川ハシタ の内下小頭距キハシタ て  
玉頭ハシタ と安すふ密度ハシタ け幸小龍ハシタ そ  
もといひととよ。それかくハシタ う先年ハシタ に  
新ハシタ のをすきゆりすち童川ハシタ の称ハシタ され

。起坐とて之に京師 建仁寺に憩ひ  
首ともてて人平の鶴齋作。是ハ中源  
したくわざくもろの茶道の傳すゆ  
あくとく手とせられしとぞ

。行幸社の御起とては大既ちゆきせよ  
もるを志仰。タリとゆきりまこと  
あかく半なり。御まみよ多日とぞ  
我尾別一文御紀と 故工所後して此と  
秘。タリや。おさすとくれと作。是  
祠官までしてと稀能のやうもゆかく  
ねされま。そのウナ故音門家の會上

。うて命されと辭乞。小いよ。乃る  
とき文をよも。年室虚誕矣。

故公の仰。は育てて。是れと切ら。そくハ  
させ。されと。かくふ。御まみと。世盡節  
して。一文の御。と。り。こ。は。下。り。か。し  
す。と。か。り。わ。く。り。り。あり。と。化。と  
夢。を。ま。わ。か。り。一。沙。心。を。り。と。事。を。す。が。  
代。の。内。の。作。が。お。活。と。う。い。か。り。や。  
。済。晋。布。と。く。か。り。あ。れ。感。す。ま。く。  
。内。部。送。す。と。り。よ。う。と。通。出。た。史。教。  
内。室。ハ。天。井。か。く。角。柱。裏。の。ま。く。送。す。

。是も紫宸殿法事殿也。こゝもうちむち修  
。トシヤ法事の全堂を以て内室修の法とす  
。古佛像はそぞの作として希多の跡と  
すりおすり小日和紙ニキニ韻作鳥為造  
佛え工と云。推古天皇御宇の人あれば  
いとまれり。假佛也。〔株生建中ち草子  
之身の印の内院を〕  
。或云凡て者の靈水手向ふハ佛也。小效  
俗故日か紀また勅め未だせ。叶氣詠  
偈のあと仰て玉筈小飯塙。玉櫛。不  
水盤をよと其羹の附水吹と力と云。傳  
。

初々これ承玉佛法事より寫る。まのま  
佛母と云て餓鬼の下佛菩薩が水鳥  
品甘ぬ。今の作。我移先の靈と云  
。前ま佛鬼と云て多引考究思ひまう  
まきまき新舟云凡佛鬼と佛鬼と  
と手足す。新舟云凡佛鬼と佛鬼と  
時小鳥食と摩尼半弓今佛殿の  
裏。鶴林寺の方施鬼の事と云す  
す。新舟云。鶴林寺等の鬼れは  
。大堂に手足する。新舟云。柳柳の樹をも  
佛鬼と云。施鬼の法事當れをも。是も

移去の故へ食ひ亦記ふと  
とかや

○大和國世尊寺のむらハ我生も縁のゆき  
え亨  
萩書

○青蓮、皆丹果、唇と針せし丹菓梵語ハ頻  
婆唐にてハ相思子と云翻譯名義不有  
俗俗云タウアツギ

○御湯殿ユトノ上ヒトハ草抄物多く誤りて解説  
やく先夢裡のるの称呼をニ水記大永  
六年四月の條上般約ノル甚體所儀  
定為御湯殿上等とづり界と稱すより  
掌拂不の而扇面のゆき是四字連接

一たち称かく上の字あられハ御浴室  
の事たり。元慶戒記承永二年十月  
の條小御湯御平倉の後今始御湯殿  
セと云へん。御浴室の事あり又御湯  
殿記とちする。あは因くとて也居の文  
御よ日記せさせたゞ御紀しゆれと裏事  
十六日正御りつよとくゆき御手附え  
ゆふくゆ事あるとあるゆとさうす  
さよもやあきまつやなじてゆふく男  
をりまきしめあくとくゆく女度の事

まうこどもニあゆるのみどもん一りゆちのと  
ゆきうるひたるゝまほーてくとみども  
山よのたゞくつらぐのと朝すも津の山  
まくら

かくふの法ありけぬむけちとへ今よ  
そきのやううりゆのちととくの  
丁派のすふや草すとの称もすとくまう  
りつまがとんゆ

。和漢俗語も古今すとくの音誰或著  
せし。磐石と百年のあは候の傳と云  
頃日ハ此とこまの所と云う。かくふ

者天邦より多きより彼事也とすけ

。囁子ヒシコ 我にふま 小嘍囉スララコロ 小聲 駕言馬ヤクイマ 多

。附宿ツカケウ とくとく 間香ミクシ 附ツカム 一夥イチイシ 夏人サマヒト 久

。尾列志虎山ハ天文年中織田備後守信秀  
紫シモを左度シモの株シモの名シモ也シモ。城塙シモ

百間余南北シモ。卒後小信長シモを繼シモて全シモ。

。武若守信行シモを承シモし弘治三年シモ信行

室シモを承シモし後廢シモ燕セ。今桃巖禪寺シモ里中

にゆきと名シモ。桃巖道見信秀松岳道悅  
信乃牌子シモ。名翠秀顕シモ。朱木田翁

家の門子と々け寺ハ快翁後和尙の完墓

。諸社の神官称呼久久 東小諸社日本後記  
大同二年の條下曰或有任神長事辛道  
例其有官符任神長者宜改為神主ト云  
けうちといハ神長と呼ト初レテ神主と  
称トセ也然トニテノ保勧ノ一稱宣  
と長官と呼ト首の神長のと考サル  
少々

但シ長官次官ハヤニスケトイツハ一稱宣と仰  
前文亦シ長官と稱す矣

帝宮もリ始太神文代ミ造啓旦ハ襄せ  
運小傍リ古代のすリあリ年多リ  
多リト和別提拝ハ孝謙帝の御礼天章  
富字三年己亥創建今正徳四年甲午  
かル九百丙辰立年辛卯アカ一度の上  
梵刹サ

。牛頭天王の梵語密宗の次第也ト多く知り去  
チチ明瞿麻子樹叶波耶アラマ提婆囉アラマ

瞿麻子ハ牛頭樹叶波耶ハ頭提婆葉天囉惹ハ舌

。或向國温泉涌出の地必祈祀を祀りて往し

す吳邦カモガタと云ふと曰三秦記云驪山

温湯ヨウヤ曰説シテ以テ三牲祭乃得スル之ミ

富家入道殿トシマニ後賴朝タケミコロ之ミ日邊ヒマツキ

懐ソラノ懐ソラノ子チ年ハて記メモはシテうきシテおふシテ元

かソシ欲シテ小シテあシテ妻ヒメの中ハうきシテおふシテ元

乳ミルクのマ四シテもシテおシテうれシテうれシテおシテ元

けソシおシテとシテ便シテいシテたシテあシテおシテうれシテうれシテおシテ元

おシテうれシテおシテたシテあシテうれシテうれシテおシテ元

永ヨウ綠リョウ絶ゼツ叶ヒタチ草グサとシテ供シテおシテうれシテうれシテおシテ元

記メモはシテうきシテおふシテ元

也シテ御シテ綠リョウ絶ゼツ叶ヒタチ草グサとシテ供シテおシテうれシテうれシテおシテ元

シシテおシテとシテうれシテうれシテおシテ元

りシテおシテとシテうれシテうれシテおシテ元

りシテおシテとシテうれシテうれシテおシテ元

もシテとシテうれシテうれシテおシテ元

うシテとシテうれシテうれシテおシテ元

うシテとシテうれシテうれシテおシテ元

或シテ日ヒ劫カツ神ジンうシテおシテ故シテ對馬ツushimaをシテ歴シテ也シテ

小シテうシテ育シテ祐シテ代シテ新シテ羅シテうシテ東シテ日ヒ向シテ也シテ

つまへやうふくたうへとたゞひきま  
やとや曰くふきへー 無列の海中桟  
桐<sup>リ</sup>橋とより每年 鮑<sup>鮑</sup>地<sup>シ</sup>づらひうら  
來多方とくにまほひまよの主産者<sup>主産者</sup>江<sup>カニ</sup>  
とておつまき屋をめりく年りく人  
をもす一とくに夜多韓<sup>韓</sup>わう  
あまちとくにとんとんのりふ韓<sup>韓</sup>う  
島のふくね年十五 仕くす  
の島<sup>島</sup>宇土の島<sup>島</sup>ハナリやあだちもす  
摩<sup>摩</sup>波<sup>波</sup>の下とうに海をうり宇ト<sup>ト</sup>小<sup>小</sup>舟<sup>舟</sup>  
山<sup>山</sup>きもそそりまく入ロ凡二千石斗

ぬふさすたにかうふ六月を秋也五年の  
や<sup>一</sup> 宿中<sup>宿中</sup>の祠とまつてゆうじをいと  
神<sup>神</sup>まひだりと見る所のれふ竜宮穴を  
見<sup>見</sup>ぐるもくの穴めうみうれのれを  
ゆが<sup>ゆが</sup>ておさ<sup>さ</sup>とえんしん<sup>しん</sup>人<sup>人</sup>達れ  
自<sup>自</sup>渴<sup>渴</sup>瘧<sup>瘧</sup>の<sup>の</sup>列<sup>列</sup>はと玉<sup>玉</sup>か<sup>か</sup>てうの<sup>の</sup>  
御<sup>御</sup>きく<sup>く</sup>祭<sup>祭</sup>

。今太清康熙五十三年也帝<sup>帝</sup>辛未辰金<sup>金</sup>  
正<sup>正</sup>三年の内<sup>内</sup>まゐ省の年貢其半を減  
せしむ是正位の永きと役せられ作<sup>作</sup>る

。我玉厄年アマミツルの役ウラにて尊卑スンビ切カタる是  
邦ハム亦年ハサシテの役ウラにて其拘スル御國  
ノ  
甲四十二年正月邦 七歲吉日正月廿五日辛酉  
妃三十三年正月 平十二年六十一星 壬午年丙寅  
男ヒト忌雙女スルヒメ妻ウニ復スルトモ子ハコ陳繼儒ジンジク君  
碎スル縁エツツて少齋ショウサイの事ハシ渾ウラ身シム説セイツ亡スル  
して入學スルと承スルかが人ハシマ偶年ハツニの俗ハヂマ  
を以スル許マハシマと一年ハツニあはれハラハラ有スル  
レ久ヒローと又ハシマ冠年ハツニの先紀ハシマ小男ハツシタと偶  
年ハツニと忌ハツシタ年ハツニと互ハシマ生スルて禍ハラハラ有スル  
令リり、俗ハヂマ忌ハツシタと互ハシマ生スルて初ハツシタと  
信スルマ鳴ハナシマ惡ハラハラ哉ハラハラせハラハラの人ハシマ

。法論味噌ホリハラシハカリと南都ハナシマの制ハシマと奥宿等雜錄ハシマ  
十日法場ハシマ日ハシマと直ハシマ禮師ハシマ等ハシマ小水ハシマの水ハシマ不坐ハシマ  
退ハシマすとハシマとハシマとハシマとハシマとハシマ玉豆ハシマ部ハシマと食ハシマ後ハシマ論  
味噌ハシマの名ハシマりハシマとハシマや後ハシマ後ハシマとハシマ古ハシマ多ハシマ食  
すハシマりハシマさハシマりハシマと云ハシマて惟ハシマ舉ハシマるの延ハシマ試ハシマ  
考ハシマ食ハシマは無ハシマ小ハシマとハシマ戴ハシマと紀ハシマセハシマ一毛ハシマ又  
坐ハシマと立ハシマと候ハシマと

。狗ハシマ胎ハシマ婦人懷ハシマ而ハシマして經水ハシマ行事ハシマ者ハシマす  
也ハシマ者ハシマと云ハシマ一毛ハシマ言ハシマ集ハシマ小ハシマ又ハシマ而  
时俗ハシマの名ハシマりハシマ所ハシマ鹽胎培胎ハシマハ右ハシマつハシマ  
之ハシマ行ハシマうらも家俗ハシマ云ハシマ鹽生胎ハシマ者ハシマす

。触不触論よ嘉靖年中少翰林二人の肩  
棄に棄て極をわれハ性よりせー萬曆小  
至てハ四人の肩棄が棄り路と是き郭門  
をかりふうれと向者有りとりぞ我今  
女はめ人自病と称して腰棄する  
二四十年前と希から一庸醫も言  
人ぬ卑支と用て篤を走らしと景  
とす而俗如此嗚呼

。肥前国佐賀多良里川上とより所  
付地ニ生る盲ハ老少共と云皆猿乞也  
行乞者也里俗行水法水法ハ扇焉胡

九月より立り日比村の川ニ大蛇住て人  
とあり年久ニ多劫強弓大矢をやりて  
彼蛇を射る猶リ弓矢之矢蛇を射ぬま川  
上より其の處ある楠ニ立蛇川底小  
沈若々と音若々一刀と手て水に入  
る蛇纏縄をつりてりりや後世小兒  
叶里の盲人ハ一刀を手とし二三十年  
あ彼社おち拂一枚板板一小も多牛小  
大のみかづりとある年のねわうんのの方  
ハ牛糞水水も何かもあかとゆく天人掌掌  
有りと見えて神人人也也有故

の矢を柳に射つてうれしくて不思議  
うれしかつてとて御よしもとくわくとく  
尼侍サマニ——也ゆめくわゆせ——くは役エフとくふ  
手ハシ

。茶人宗

珠光

宗殊

南都泉徒

宗悟

紹陽

政智佐喜仲村

古波舟子

宗易

俗名千金西席  
利休

春屋室子

宗屋

吉田織部

皇勝

古波舟子

宗甫

小痴達江年改

金葉出雲傳  
安和

和

伊久間將監

御部等威道庵子

宗山

成道庵子

喜山舟子  
義川三齋

元桐貞守

正直子

海越伊豫守

正直子

一尾舟織

利休——道安——千宗祐

紀別家代有之

。太平記曰常法ハ四品以下平侍武士ノン下開板

打スノシ葦ノ家ニメモ居又事ニテコソアリト云

按スルニ當時諸丈丈トイハ丘家ハ皆板葦艸

葦欽後世無法壯觀ヨリ運フスルノ榮ト大鳴呼

。西山善峯寺證空号善源空上人土御門贈從

惠

一位前内大臣源通親久我七男ト云一日加賀更擢

守親季子ト云栗生光明寺蓮生号實宇宇都宮

座主宗圓栗田開白道氣詠

之子座主三郎宗綱好爲

中原家養子仕外記後飯本姓其子宇都宮

朝綱立身門尉武者井其子成綱左衛門尉其子宇都宮檢授額

綱依朝政事

公象入源空文門即蓮生是也其

風流土佐

子修理亮下野守泰絅母平時政女也二男貞守宗朝  
皆子孫多矣女子二人一嫁内大臣通成一嫁權  
大納言為家

。伴勢国司公官在大河内北畠一族相習居之行司勢  
北畠 権大納言徒三位頭雖号大河内滿權二男有子孫  
滿雅權大納言教具右中將政歸權大納言村親  
參議左中將晴興教信長公教之信雄信長元年見教為  
三男號權大納言龜岩北畠教具以讓納司政号  
龜岩龜泉と云二書京師相國寺北畠教具  
り室町將軍をみの寶源也日件錄也  
足利家與廢の小説文明雜談ハ高叶の説  
話あり焉く又誤謬誤也一か月と5年

### 杜撰の類よれす

- 。上を以てとい處上人の称呼強半ゆゑ河内上  
のを四位欲太丈達ニテヨシタマタニテとい又位の者と云弘上  
六位とは刀祿セウキシヨウと呼
- 。ウナリとゆふとキムクのほの欲尾張國内海郡  
常陸國内海郡異邦の書コハ裏海とすせう海所  
纂要サムヨウ寺少くす外洋裏海とちく
- 。相撲コセキコズア等の移りホモコト  
アキモト解人セイモウヒン部領ヒュウガとソラハキモト  
古れアラレお様人のアラレ解アラレく  
ナリヤキコスアリトリハモトモトモトモト

向二幅射の絵ヨ一絪衣と縫當ニテ  
朝阳ト云又一絪月下浦經の古店と金  
ラレト對月トリシテ乃ち射後也射前トシテ  
車と御すと云市曰ナレ社師の名車  
也す古人の句休と署セナムのあまの  
歌トヤト云カノノ其句エ  
朝阳補破衲 對月不残纏  
此を朝阳對月ノ圓よりニ絪のみ少ヒ  
作すさればかどキト舞トナシモ  
らひ賛同るトカラハト傳滅者の  
為死ノミキナリ

。藤氏有家祖正一位武智齋テチヤ贈大政大臣而墓  
大和國宇智郡宇野村永山寺洛東泉涌寺支配後山  
の巔ニ立古松一株後ノ阿陀墓トカリニ景勝  
め地ありとりよ彼寺ハ壇坂の西有四里斗  
土屋川の少鶴あり源城のせ牛馬を通  
せず若ちぬ者幸てこれハ必伏トて何  
ゆニ伏トシカヤ寺主武智齋の御斎  
とお主す東帝ハシタミツヒの繪あり像  
小豆色と描き侍トナリ  
。三輪の捨糸スルトリシテ一山のやく小柳の廢井  
山古松の多シ十全町を駆り清て水

高ニ捨シヨリ即キトモ御せりは宗  
捨樹高リ作リテテ改ム

少人谷と云

俊郎庵云

豪原金蓮寺ノ社

。長谷寺荒廢の時元津井丈<sup>豪原金蓮</sup>  
住セシキトキトキは影人云々  
。壺井の八幡東有三里所あり又源和信  
義家之代の御墓ありえ源も牛糞  
小糞<sup>牛糞</sup>之在於此西一石の字あり神經と  
御坂<sup>御坂</sup>ニモセ<sup>御坂</sup>同時通<sup>通</sup>すと傳  
立アリニ古ふめ地と寄<sup>シ</sup>セシ言葉云々<sup>牛糞</sup>  
井<sup>井</sup>五尺二十石とサヘ壺井<sup>井</sup>

八幡丈山下小野<sup>小野</sup>井肩不<sup>不</sup>そ佛像と  
多雕<sup>多雕</sup>侍るむ古代よりのと云々  
。山城國紀行船井<sup>船井</sup>中里の堤小<sup>小</sup>やまぬ<sup>ぬ</sup>  
たお<sup>お</sup>めめ<sup>めめ</sup>井<sup>井</sup>のゆ<sup>ゆ</sup>あみの里<sup>里</sup>  
もあやうり山下沸室<sup>沸室</sup>と云ふ不<sup>不</sup>井<sup>井</sup>の  
植<sup>植</sup>めうとう<sup>うとう</sup>右<sup>右</sup>あみのう<sup>う</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>めめ  
。我<sup>我</sup>生<sup>生</sup>て<sup>て</sup>も賣<sup>賣</sup>う<sup>う</sup>と業<sup>業</sup>をす  
考<sup>考</sup>トハクラウト云是<sup>是</sup>仰<sup>仰</sup>案<sup>案</sup>と詫<sup>詫</sup>謬<sup>謬</sup>と  
かくして<sup>して</sup>りて又馬士老<sup>老</sup>子<sup>子</sup>かく<sup>かく</sup>持<sup>持</sup>す<sup>す</sup>  
馬<sup>馬</sup>エ連<sup>連</sup>ト<sup>ト</sup>此<sup>此</sup>め<sup>め</sup>年<sup>年</sup>群<sup>群</sup>物<sup>物</sup>と<sup>と</sup>口<sup>口</sup>能<sup>能</sup>  
少<sup>少</sup>て<sup>て</sup>わ<sup>わ</sup>効<sup>効</sup>宿<sup>宿</sup>の後<sup>後</sup>高<sup>高</sup>此<sup>此</sup>處<sup>處</sup>當<sup>當</sup>時<sup>時</sup>既<sup>既</sup>

馬の事と云ふやうれ兵少名  
ゆる原田馬の子と曲がりと後世姓家  
業又似て左馬士連と音も清いクレ  
と云ひ一と又將へハクロハクワラをと  
呼へと/or/青葉師の跡アリとやうと  
ナモル腰筋とヤソシをことあと等  
き歎

○偶経鹿とかのちくわかとハサ黙臭氣  
わたりねぶりとと申曰ひむ多能は鹿の牡  
を鹿ト云牝を鹿ト云かとトカとトキの

辛一五

### 熟田、官符

神主外正八住下祝部官磨ト云々

右職位姓戸名を別て云へ日

神主職

也外正八位下祝

姓部戸官磨

祝部ノ姓ハ姓裸達角奪命文後也云々

當時祝部氏を以て熟田の神主に補ひて

足くす

祝部の類巫部官部物部工部等の如  
類とは皆其子也相傳真人の如一今熟田  
宮の祝山祇少て祭不祀乎官磨の衣冠云  
設立昭和年後田祝山祇ハ主工師

氏也

大祝ト云ハ尾張氏祝とモウリツハ神ノ  
の神供乞ホフリトモ牲を屠取役人  
モリシ和一ト称す。役家ハ役初と書  
カタトキ書一メテナリ。

昌泰三年四月め官符に號の社の役者四  
升もミモリテ役職あり。氏ハ半木也。  
叶官符封家細丁の字ナフケモウテウニ清  
音我官符有

○鶴田官の神ノ尾張氏ハ又司移主役師  
熱換役等事例ありて補す。宇野氏ハ

大内人也。尼山郷頭今郷太支ト称す。大宅  
真人ハ列當焉。田真人ハ換役等小補せし  
も他大京及郊ホの役氏回衛の友人  
初皮ニシテ。一脉矣。今のニシテ尾  
法氏を神官と称ト。其他役家と書  
亦大京中ノ宿ト以よ左。け称る。其  
ノトサム人々。又司役師也。渾名役者也。  
苗代れをモセ。トセ。渾名役者也。中  
又ハ渾名に繚の持貫等と書す。之  
年神官也。

不腐人也。而て相と改む

○ 稗田大文祝師職 田嶋家惣檢授職 馬鳴家守知  
叶介ノ前記之

八劔宮

祈年祭新嘗の儀  
俗節等ハ守部氏

丑郎丸

祝詞

高倉宮

立昂丸右京宮守也但說詞ハ五郎丸奉宣

源太丈宮

神宜職馬場氏神供ハ馬場氏ヒ立昂丸供奉

火割宮

翌日ノ祝詞ハ田嶋家奉宣ニテ神鑑引啟ス

田嶋家奉宣

氷上宮

久米氏但神宜職ハ田嶋代補之  
故ニ李御祭札祝詞奉宣

紀太丈宮

厨家諸司ノ二家掌ハ  
田嶋家祝詞奉宣 東西十三社

二李御祭田嶋氏祝詞但  
青令社ハ立昂丸祝詞

乙子ノ社

年賜第一  
神官奉之 彦若社 年賜第二  
神官奉之

御田ノ社

長岡氏奉祠 伊上太丈  
田嶋家祝詞奉宣ニ季子御祭奉宣於此社行之

